

かえんさいの褐斑病（新称）

かえんさい（ビーツ）は近年北海道で栽培が増加し、令和4年頃より道内各地で葉に中央が淡褐色～灰褐色、周囲が紫紅色の円形～不整型の病斑が認められていた。これらの病斑には針状～長い棍棒状の分生子が形成され、ここから糸状菌が分離された。分離菌をかえんさいに接種したところ、原病徴が再現され、接種菌が再分離された。接種した病斑上にはテンサイ褐斑病菌に酷似した子座および分生子柄を形成、針状～長い棍棒状の分生子を単生した。テンサイ褐斑病との異同を明らかにするため、テンサイ褐斑病の分離株を用いてかえんさいと相互に接種したところ、いずれの分離菌もかえんさいおよびんさいに病原性が認められ、形態および病原性からテンサイ褐斑病菌と同一と考えられた。一方、テンサイ褐斑病菌は *Cercospora beticola* の他 *C. cf. resedae* および *C. hokkaidensis* が報告されているため分子系統解析を行ったところ、*C. cf. resedae* および *C. hokkaidensis* と同じクレードに属した。この結果から分離菌は *C. cf. resedae* および *C. hokkaidensis* のいずれかの種に属すると考えられ、現時点では本病を *Cercospora* sp. によるカエンサイ褐斑病とする。

（中央農試）



かえんさいの褐斑病（中央農試 新村原図）